

丸 尾 古 墳

— 小長井町丸尾地区急傾斜崩壊対策事業に伴う緊急発掘調査報告 —

2008年

諫早市教育委員会

発刊のことば

小長井町に所在する丸尾古墳は複室構造の横穴式石室をもつ装飾古墳として注目されている古墳です。本県には現在9基の装飾古墳が確認されており、そのうちの2基が小長井町に、1基が高来町に所在し、他の6基が壱岐に存在するという分布状況を示しています。装飾古墳は熊本・福岡県に多く分布し、その偏在性や装飾性において九州の古墳時代後期を代表する例で多くの研究素材を提供しています。

このたび丸尾古墳が所在する地区が、急傾斜崩壊対策の事業箇所として指定され、今次の緊急調査にいたったのは重篤な災害の未然の防止からして事業の必然性が認められるものと思料しております。

のことから、事業に際しての事前の調査として今回の調査を実施したものであり、消滅の可能性をも考慮しながら万全の調査を実施したものです。

なお、調査に際しまして発掘調査のご快諾を頂きました土地所有者黒木雅之様、嚴寒のなか作業にご従事いただきました皆様、また県学芸文化課はじめ関係諸機関に衷心より感謝申し上げます。

調査の成果が今後の研究の素材として活用され、また地域学習の素材として活用されることを祈念いたしまして発刊のことばといたします。

平成20年3月31日

諫早市教育委員会

教育長 峰 松 終 止

例　　言

1. 本報告書は諫早市小長井町丸尾地区急傾斜崩壊対策事業に伴う丸尾古墳の緊急発掘調査報告書である。

2. 調査は諫早市土木部河川課の依頼を受けて、諫早市教育委員会が実施した。

調査体制は次のとおりである。

諫早市教育長	峰松 終止	教育次長	平古場 豊
文化課長	松本 玉記	参事	秀島 貞康（調査担当）
参事兼課長補佐	船岡 秀海	事務職員	森永 蔵太（調査担当）
文化財調査員	古賀 力（調査担当）	調査指導員	橋本 幸男（調査担当）
調査作業従事者	江越勝利、賀村義昭、中島フヂ子、原田瑞恵		

3. 調査は平成19年12月17日から平成20年2月22日まで実施した。

整理作業は調査と併行して諫早市郷土館で行った。

4. 本書で採用した方位は磁北、高度は海拔高である。

5. 内部主体である横穴式石室の図面については昭和47年長崎県文化財課実測の主軸・水準高を復元して実測した。

あわせて、昭和47年に実施された長崎県文化課の実測原図をトレースして掲載している。

なお当時の調査の成果については『長崎県埋蔵文化財調査集報V』（長崎県文化財調査報告書第57集 1982）に収録されている。

6. 調査の記録にあたって作図した図面類や写真類、出土遺物は諫早市教育委員会が保管の任にあたり、諫早市郷土館で展示・保管している。

7. 本書の執筆分担者は次のとおりである。

I 秀島 貞康
II 古賀 力
III 秀島 貞康
IV 秀島 貞康
V-1 秀島 貞康
-2-1 橋本 幸男
-2-2 秀島 貞康
VI 秀島 貞康

8. 本書の編集は秀島が担当した。

発刊のことば

例言

本文目次

I.	調査に至る経緯	1
II.	遺跡の立地と環境	1
III.	調査の経過	4
IV.	調査の記録	5
1.	古墳　－1　墳丘	5
	－2　石室と羨道	7
2.	炭窯	8
V.	遺物の出土状況と出土遺物	13
1.	遺物の出土状況	13
2.	出土遺物　－1　土器	14
	－2　鉄製品、その他遺物	16
VI.	調査の総括	18

挿図目次

第1図	諫早市位置図	2
第2図	遺跡分布図	3
第3図	遺跡周辺地形図	4
第4図	1 トレンチ土層図及び等高線図	6
第5図	石列・集石実測図	6
第6図	2 トレンチ、炭窯及びトレンチ土層実測図	8
第7図	昭和47年石室実測図	9～10
第8図	平成19年石室実測図	11～12
第9図	前室遺物分布図	13
第10図	遺物実測図1	15
第11図	遺物実測図2	17
第12図	墳丘想定図	19
第13図	丸尾、大峰、長戸鬼塚石室平面図	20

図版目次

- 1 - 1 丸尾古墳遠景（東から）
- 2 丸尾古墳調査前の状況（東から）
- 2 - 1 敷石敷設状況（東から）
 - 2 敷石敷設状況（南から）
 - 3 敷石敷設状況（北から）
- 3 - 1 敷石除去後と根固め石の状況（東から）
 - 2 敷石除去後と根固め石の状況（南から）
- 4 - 1 奥壁と裏込めの状況（東から）
 - 2 石列・集石と封土の状況（南から）
 - 3 1トレンチ土層堆積状況（西から）
- 5 - 1 2トレンチ炭窯半掘状況（北から）
 - 2 2～3トレンチ土層堆積状況（東から）
 - 3 昭和40年頃の丸尾古墳（下川達彌氏と封土の残存状況）
- 6 - 1 玄室青銅製把頭（第11図1）出土状況（敷石76の下）
 - 2 玄室全環（第11図53）出土状況（敷石9の下）
 - 3 前室遺物（第11図17、39）出土状況
 - 4 前室遺物（第10図1、12、15）出土状況
 - 5 前室遺物（第11図15、鉄鎌茎）出土状況
 - 6 前室遺物（第11図35、鉄鎌片）出土状況
 - 7 2トレンチサブ・トレ須恵器（第10図11）出土状況
 - 8 2トレンチサブ・トレ鉄製刀子（第11図12）出土状況
- 7 出土遺物・土器（1～13）
- 8 出土遺物・土器（14～27）
- 9 出土遺物・鉄製品など（1～17）
- 10 出土遺物・鉄製品など（18～53）

I. 調査に至る経緯

諫早市小長井町丸尾地区が急傾斜崩壊危険区域に指定されたのは平成11年7月16日のことであり、これに伴い急傾斜崩壊対策事業の継続・実施がなされている。

さて小長井町はここ丸尾地区のみに限らず、建築資材などの材料として使用される帆崎石を産出する地として夙に有名であり旧蕃時代から石材の切り出しを行っていた。

この帆崎石切り出しのことについて『北高来郡誌』には文化年間のこととして武富納助の石材業開始の記載をし、ここ長里帆崎より始まったと記している。

このように小長井における石材業の開始はかなり遡るものと想定され、当初は人力による、あるいは発破による小規模な採掘作業が行われたであろうが、時代の推移とともに大型機械化・広域化した範囲での採掘事業が行われてきたのである。

このような推移を想定するとここ丸尾地区のような崖地での採掘が好適であったと思われ、ここでの開発は最初期に遡るものと想定される。かつて石材積出港の最適所であった帆崎港が眼前に位置することもこのことを支持している。『北高来郡誌』にいう武富氏が長里帆崎に来て石工業を開始したと伝えるのはすでに海運を利用した石材販路の確保を意味しており、積出港の確保が最重要課題であったことを示唆している。また文化年間を遡ることとして秀吉の大坂城築城に際しここから巨石を大阪まで運んだという話が残されていることも上述のことを裏付けるものであろう。

以上のようなことから丸尾地区での石材採掘は古くより行われたものの、丸尾古墳の存在により直近で停止されていたことは幸運であった。ところが平成3年に発生した台風17・19号の影響により、古墳が立地していた崖地が地崩れを起こし古墳東側側壁・天井石がすべて崩落してしまったのである。崖下には人家が存在するものの、直接の被害を与えなかったのは幸いであった。調査前の状況は崖下には東側腰石が横転し、これにリバウンドするような格好で天井石がさらに人家に近接した状況であった。

このことから丸尾古墳一帯も急傾斜崩壊対策事業の対象地となり、平成18年から市河川課との協議を実施し、記録保存のための調査を実施することとなったのである。

II. 遺跡の立地と環境

諫早市小長井町は諫早市の北東部にあって佐賀県と境を接し、その殆どが多良山地を形成する豊肥火山活動によって噴出した火山碎屑岩・凝灰質岩・輝石安山岩等多良岳火山岩類が基盤の玄武岩を覆って分布する火山性台地である。台地は北西から南東に向かって傾斜し、長里川、小深井川、船津川等の浸食によって放射状に有明海に没して出入りの多い海岸線を形成している。その海岸線に沿ってJR長崎本線及び国道207号線がほぼ平行して走っている。海岸線は人工海岸以外は泥砂礫浜海岸であり、干満の差が激しく200~300mの干潟が形成される。

丸尾古墳は諫早市小長井町牧名丸尾にあって東経130度11分、北緯32度54分50秒を測り、多良山地より有明海に注ぐ小深井川の河口に営まれた帆崎港の右岸台地上に所在する。標高は約17mを測り、海岸からの距離は30mである。

小深井川を隔てた対岸の岬、帆崎には県指定史跡長戸鬼塚古墳が所在する。諫早市小長井町には前記古墳の外に同時期の古墳として北方には竹ノ崎古墳、城山古墳群（市指定史跡）があり、南方には大峰古墳（市指定史跡）が所在する。いずれの古墳も有明海に臨む台地先端部の標高10m～20mの場所に立地している。

さらに隣接する有明海沿岸をみると北から佐賀県藤津郡太良町には伊福古墳群、長崎鼻古墳群、宝前鼻古墳群、野崎古墳群が、長崎県に入ると諫早市高来町に善神さん古墳などが知られている。善神さん古墳以外の古墳はいずれも同様な立地の古墳である。有明海に臨む岬状地形の先端部に立地する古墳周辺には経済基盤となる平地に乏しく、これら古墳の被葬者が有明海を活躍の舞台としたことが窺われる。

古墳時代以外の周辺の遺跡については旧石器時代の遺跡として昭和51年刊行『小長井町郷土史』に山茶花池遺跡、弥次郎遺跡、田原大宮良遺跡が紹介されている。また『高来町郷土史』には牧名染切遺跡で採集されたナイフ形石器、台形石器が紹介されている。いずれも採集資料で実態は明らかでない。縄文時代については最古の遺物として井崎名風呂ノ子から出土したといわれる尖底の条痕文土器の底部がある。山茶花池遺跡からは早期の押型文土器、阿高系土器が出土している。石濁遺跡の範囲確認調査では早期末の塞ノ神式土器の出土が報告されている。横ミ川遺跡から晩期黒川式土器と思われるリボンのついた口縁部の破片が出土している。また田原溜池周辺の弥次郎遺跡や田原大宮良遺跡からは大量の晩期の土器や扁平打製石斧が採集されている。弥生時代の遺跡としては弥生時代初頭の井崎支石墓があり、下陰平遺跡は中期の墓地である。箱式石棺や甕棺が検出されている。田原大宮良遺跡からは大量の中期の遺物が出土し、この周辺に農耕を生活基盤とする集落の存在を窺わせるものである。

さて、小深井川が流れ込む帆崎港を見下ろす丘陵上に立地する丸尾古墳の管見での初見は『北高来郡誌』（注1）と見られ、同誌には「鬼塚小長井町 二基あり。一つは大字小川原浦帆崎名にあり。前の間、奥行五尺八寸高さ7尺、中の間奥行一丈五尺間口六尺二寸高さ一丈一尺八寸、天井石五尺二（寸）六尺五寸、小高き所に横穴を掘り、内壁と天井とは大なる切石にて疊み、その上に土を盛り草木を生せしめ、其の所在を紛らす。他の一基は大字長里牧名丸尾山に在り構造殆んど前に同じ（。）居者の由来詳かならざるも、平家の落武者の築けるものにはあらざるか。其後強賊の隠家となれりと。この他二三小なる塚あり。〔（ ）書きは筆者挿入〕」と記され、刊行当時居所との認識であったことが了解されるのである。このことについて塚が居所ではなくて



第1図 謞早市位置図

古墳として報告したものに津田繁二氏の『長崎談叢』(注2)がある。文中には「15 横穴式石室 小長井村大字長里牧名丸尾山」と記されており、これが本古墳を指している。

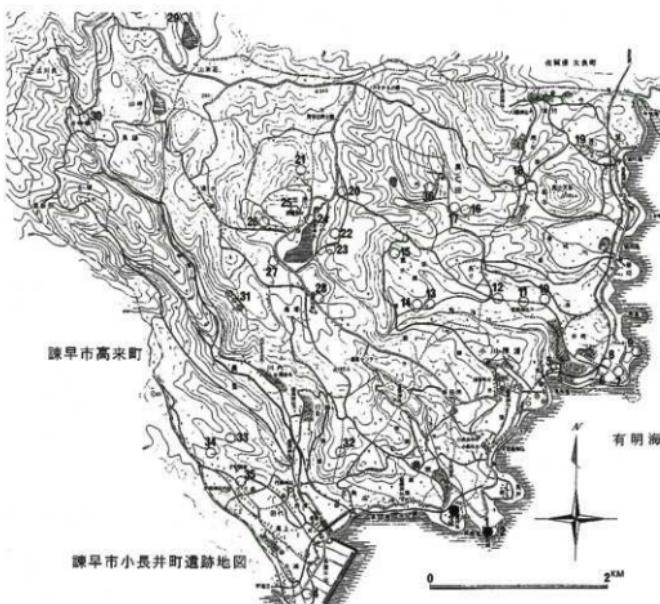
この古墳について最初の学術調査が行われたのは昭和47年である。県文化財課(現学芸文化課)が実施した線刻古墳の調査で長戸鬼塚古墳(県指定史跡)とともに現状での石室実測調査が実施され、昭和57年に報告がなされた(注3)。

その後、旧小長井町教育委員会は丸尾古墳等の重要性を後世に伝えるため、昭和52年に町指定文化財として大峰古墳などとともに史跡指定を行った。しかし石室の崩壊などにより1市5町合併前の平成17年指定の解除がなされた。

注1 「北高来郡誌」(復刻版) 名著出版 昭和49年

注2 津田繁二「我が長崎の先史時代及び歴史時代の遺跡遺物の概略について」『長崎談叢』第25輯 1940

注3 長崎県教育委員会「長崎県文化財調査報告V」1982



第2図 遺跡分布図

遺跡地名表

No.	遺跡名	所在地
1	長戸鬼塚古墳	小長井町小川原通名丸尾
2	鬼塚遺跡	・
3	丸尾古墳	牧名丸尾
4	大峰古墳	大峰名尾崎
5	井筒遺跡	井筒名
6	中道遺跡	中道
7	竹ノ塚遺跡	竹ノ塚
8	城山古墳	中道
9	竹ノ崎古墳群	竹ノ崎
10	下平A遺跡	下平
11	下平B遺跡	・
12	長瀬遺跡	長瀬

No.	遺跡名	所 在 地
13	河内A遺跡	小長井町井筒名河内
14	河内B遺跡	・
15	坂ノ下遺跡	坂ノ下
16	白わらび遺跡	達竹名白わらび
17	黒仁A遺跡	黒仁田
18	黒仁B遺跡	黒谷
19	達竹遺跡	・
20	第二郎遺跡	田原名跡二郎
21	小二郎遺跡	小二郎
22	向平A遺跡	向平
23	向平C遺跡	・
24	寺ノ前遺跡	・

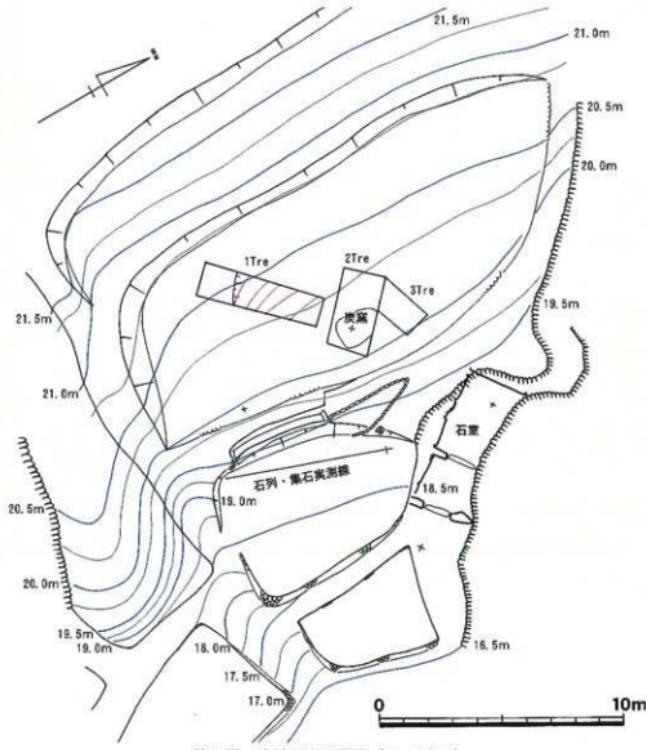
No.	遺跡名	所 在 地
25	地山遺跡	小長井町田原名地山
26	大宮A遺跡	・ 大宮
27	木森木遺跡	・ 木森木
28	向平A遺跡	・ 向平
29	山糸花遺跡	達竹名山糸花
30	井筒A遺跡	古場名井筒
31	高半第1～3番穴	門名高半、森志寺
32	石潤遺跡	内高名石潤
33	中尾遺跡	大根名中尾
34	小戸田井遺跡	・ 小戸田井
35	大瀬遺跡	・ 大瀬
36	横ミ川遺跡	黒以田名横ミ川

III. 調査の経過

調査に当たっては急崖上に立地する半壊状態の丸尾古墳の調査を安全に行うため最初に、単管を用いた足場掛けの作業を行った。足場は南北10m、東西5m、高さ6mの規模で掛け、天端には胴ブチ・コンバネを用いて作業場の確保を行い、天端は石室敷石付近に当たるように調整した。また、近接する住宅への被害を遮断するためH鋼打設による保護構の設置を行った。

古墳の調査前の状況は、石室を構成する石材の多くは崖下へ落下し、また前室・玄室への壁石の落ち込みが認められた。また前室部分は天井石がすでに消失し、完全に土砂で埋没していた。また東側の袖石はしっかりと据えられているにも拘らず、西側袖石が確認されず不安定な様子を見せていた。土砂は前室袖石付近で1.5mほど堆積し、奥壁方向に向かって斜めに流入し奥壁付近で0.5mほどの堆積が認められた。

調査はその前段階の作業として崖端に斜めに落ちかけている塊石の養生から始めた。その後



第3図 遺跡周辺地形図 (S-1/200)

羨道から前室に堆積した埋土の除去を行い、落下寸前の塊石をチェーン・ブロックを使って排除した。さらに玄室に落ち込んだ側壁石材の石室外への搬出を行って、調査可能な段取りとなつた。玄室内に落ち込んだ石材は長さ1.2m強、長径60cm強の平面・断面ともに長楕円形状の水磨された塊石で、重さ1トン近い重量物であった。

調査は前室の埋土除去から実施した。閉塞石や裏込め石などの石材間際に堆積した埋土は除去し、玄室床面の攪乱に伴う客土は篩に掛けて精査した。篩い掛けの作業では玄室内から持ち出されたと思われる鉄釘等の遺物が検出され、すでに原位置を保つた状態でないことが了解された。前室の床面にはびっしりと敷石が敷かれており埋土の除去が進むにつれ敷石上に置かれた須恵器、土師器が確認された。また、敷石間からは鉄錫片などが確認され、原位置状態を保つものが確認された。

前室の調査に併行して羨道部の精査を行った。調査の進捗につれ前室西側袖石が羨道方向へ引き倒されていることが判明した。さらに羨道部の石積みと想定していた2段ほどの石積みが、袖石の上端に載っていることからこの2段の石積みも後世の造作であることが判明した。よって羨道部は後世の攪乱によって完全に損壊していた。

玄室は東側腰石・袖石が落下し、また奥壁前面は攪乱によって敷石が半分ほど前室方へ除去され、焚き火のための坑が穿たれていた。

墳丘は調査前には全く確認されなかった。これは周辺からの土砂の流入によって埋没したためと想定され、トレンチを設定して周溝・封土を確認することとした。1トレンチにおいては地山整形部分が確認され、東に向かって急激に落ち込む様子が看取された。2トレンチでは旧表土と想定される淡黒色土の東方への高まりが看取された。また墳丘を切り込む形で炭窯が確認された。3トレンチでは封土の確認を行うため2トレンチに接して、かつ石室に直交するよう設定した。

線刻壁画は調査最終段階の2月21日に奥壁・西側腰石とともに採拓した。また、22日には床面、石室の養生をシートで行い、調査を終了した。

IV. 調査の記録

1. 古墳

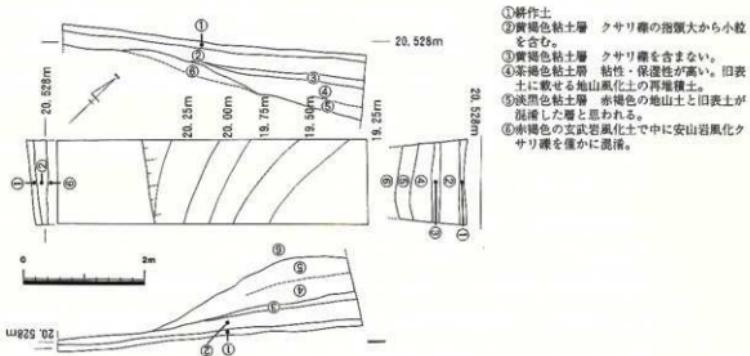
—1 墳丘（第4～6図）

調査時には古墳の封土は全く確認することができない状態であった。このため畑として利用されている部分にトレンチを設定し調査を行った。1トレンチにおいては山側の高い部分において平坦面が見られ、この位置から東にかけて地山面が急に落ち込む傾向が見られた。これは封土用の盛り土の採取と、封土の存在を視認させるための地山整形である。2トレンチでは明確な封土の確認はなされず、後述の炭窯が検出された。3トレンチ（第6図）では⑬から⑯層下位が盛土と想定され、⑯層西端で急に落ち込む部分が見られた。また⑧層は周溝部分の埋土

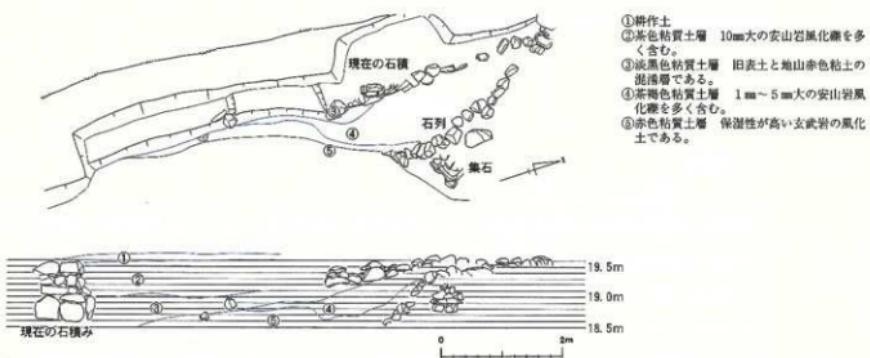
と思われ、淡黒色粘土層が堆積していた。またこの層から須恵器の壺破片と鉄製刀子が検出された。⑥層や封土は後世の搅乱を受けており、⑧層より上位の層位は近時の所産である。

トレンチを設定した畑への小径が南接しており、この崖面は石積がなかったため、断面を清掃して観察を行った（第5図）。この結果、露出していた石材の石積みは⑤赤色粘土層の上に積み石されており、往時の所産であろうことが了解され、古墳造営に伴う石列と集石であることが判明した。前述のトレンチとの関係からすると石列、集石は封土の崩壊を予防するための葺石的機能を有することが理解されるのである。

以上の1～3トレンチの土層堆積の状況や石列・集石との関係から直径14～15mを測る円墳である可能性が高い（第12図）。ただ、調査の制約から部分的に設定したトレンチ調査からの所見であり将来一定面積を調査して最終判断を行うべきであることは論を俟たない。



第4図 1トレンチ土層図及び等高線図 (S-1/80)



第5図 石列・集石実測図 (S-1/80)

— 2 石室と羨道（第7、8図）

石室は複室構造を有する両袖式横穴式石室である。使用された石材はすべて安山岩である。玄室は長方形プランを呈し基準線で奥壁から框石内側まで3.42m、また西側壁寄りでも3.42mを測る。幅は東壁石落下のため不明であるが、奥壁に東側腰石が接していたとして2.4mである。天井石までの高さは昭和47年のデータ（以下「47年図」と略す。）で、奥壁部で2.45mを測る。奥壁は三角形状の大石を1枚用いており、側壁から奥壁に渡すように力石を4段ほど架構している。この奥壁石には壁面全体に直線を縦横に線刻しており、さらに線刻後赤色顔料を塗布していた。線刻は経年により表面が剥落した箇所も見受けられるが、全体に保存状態が良好である。線刻と彩色の要素を有するものである。

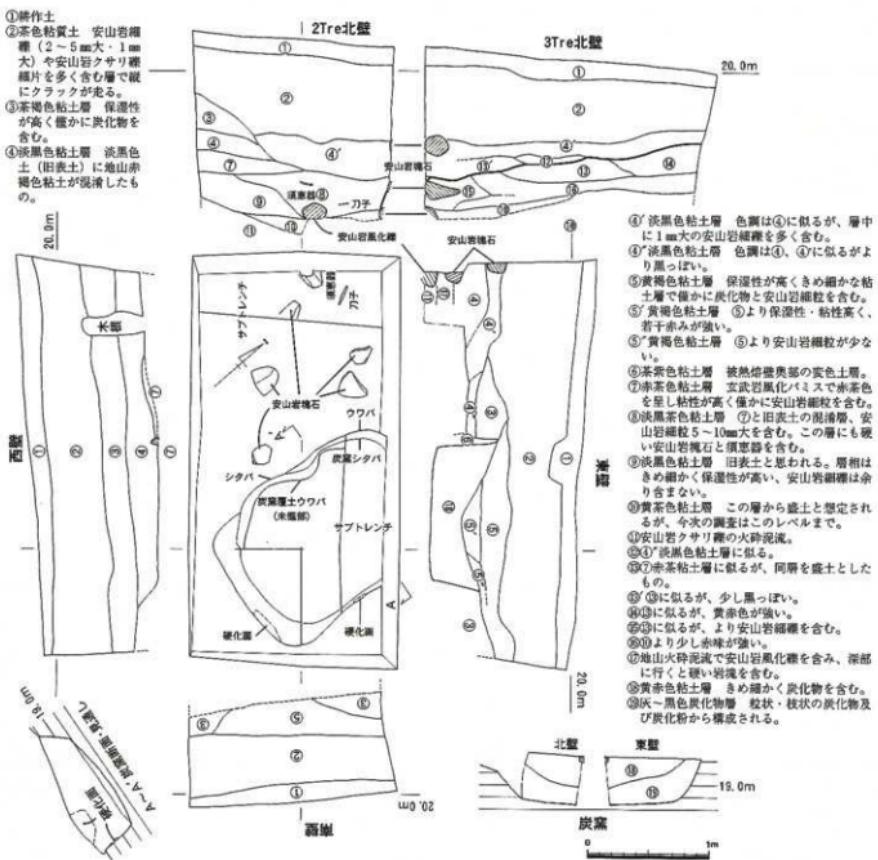
西側壁は腰石を2枚立て、奥壁寄りの腰石上には50cmほどの塊石を横位に、さらに上位には1mを超す転石を横位に2段積んで天井石を載せている。この腰石にも壁面全体に及ぶ線刻が認められるが、奥壁と異なり赤色顔料の塗布はなされていない。前室寄りの腰石上には天場が水平位になるように小塊石で調整し、その上位に80cmほどの転石を横位に載せる。さらに上位には同形同大の転石を小口部を室内方に向けて積み、その上に天井石を架構している。よって玄室側壁は腰石をやや室内方に傾斜させて立て、上位の石は持ち送り式に石積みを行っている。両腰石は掘り方が浅く、根があまり深く入っていない模様で、腰石を受ける小塊石が埋設されている。玄門部には長大な転石を縦位に立てて袖石としている。東側壁も47年原図によると同様手法で架構している。框石は両袖石間に厚さ0.2m、長さ1.27mの細長い石を据える。楣石は両袖石間に直接架構する。47年図には東側天井石との間に一定の空間が見られ、天井石との間には前室から玄室が望めるような構造になっていたことが窺われる。天井石は玄門部上の石で長さ2.3m、幅3.4m、厚さ0.8mほどの大石を用いており、2枚で玄室全体を覆っていたことが47年図で判明する。床面は古くに搅乱を受けているが、玄室半分の前室寄りに敷石が確認された。敷石は人頭大の転砾や扁平な石を堅固に敷き詰めていた。この敷石を除去すると、腰石を受ける根固めの石が据えられている。

前室は両框石間で2.08mを測る。47年図にも前室の実測図がなく前室の幅は不明である。1.2mほどの腰石を据え、上位に1m前後の転石を3段ほど重箱積みしている。羨道寄りの腰石には幅0.4mほどの石を縦位に用いている。羨道寄りの腰石上の石は前室袖石を引き倒すときに動かされており、原位置を保っていない。袖石は東側袖石は原位置を保っているが、西側のそれは羨道方向に引き倒されている。両袖石間には厚さ0.2m、長さ1.02mの框石が根深く据えられている。床面は玄室床面より5cmほど上がっている。床面には本来全面に敷石が敷設されたものであろうが、東側玄門部には搅乱により一部剥がされた箇所がある。使用された石材は大人～小児人頭大の転砾や扁平砾を使用している。

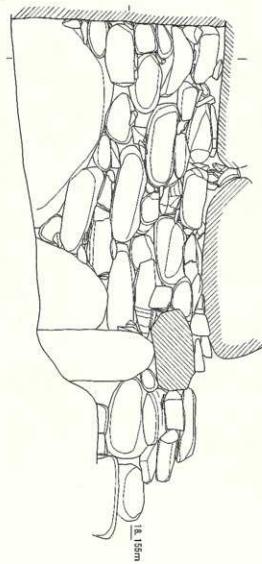
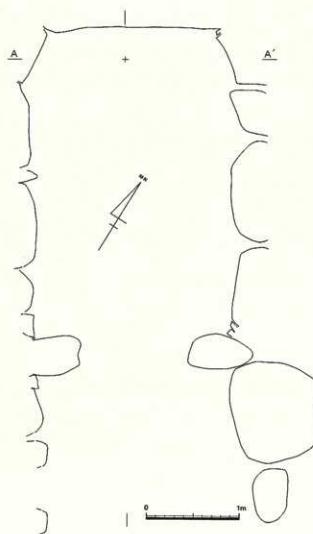
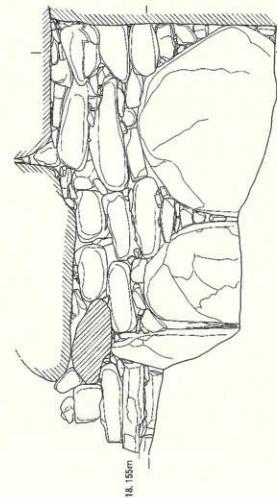
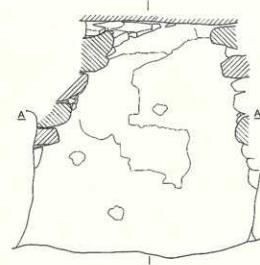
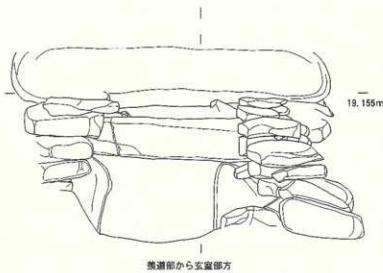
羨道部は中央部に扁平な石材をわずかに敷いたのみで、多くの羨道の遺構は消失していた。印判手の茶碗が使われた明治～大正期に搅乱され、腰石部分から消滅している。よって墓道及び墳裾の状況は不明であるが、畠を含めた面的調査の実施で判明すると思われる。

2. 炭窯（第6図）

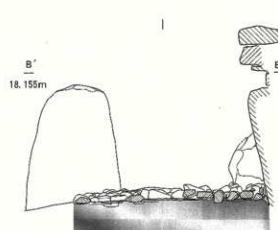
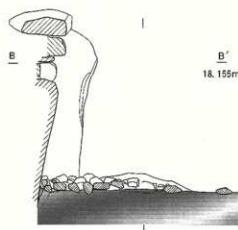
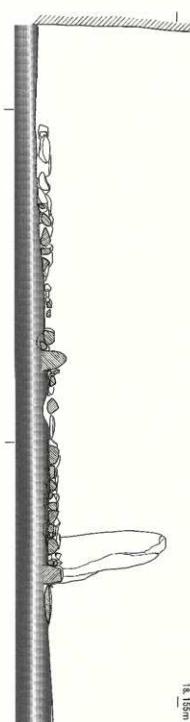
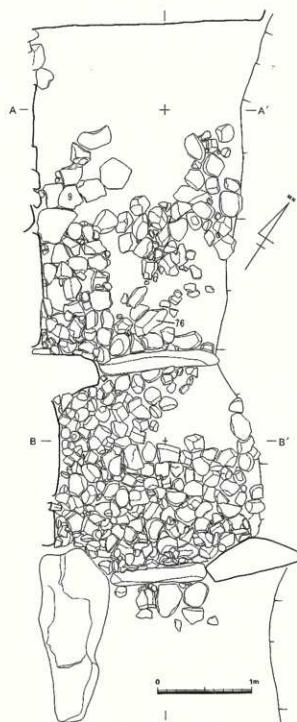
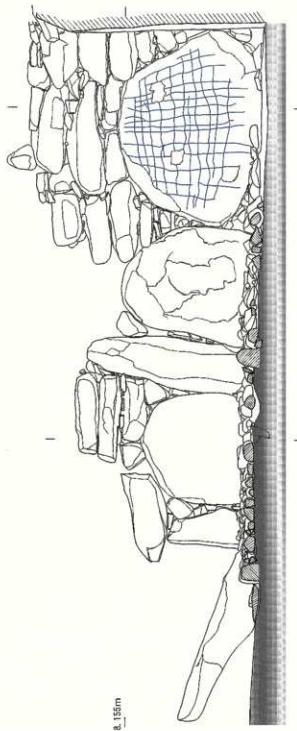
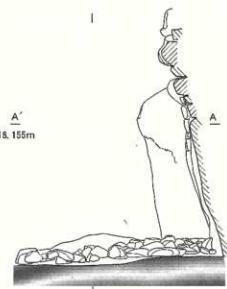
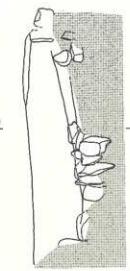
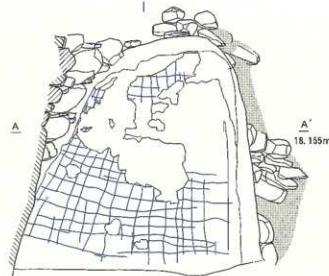
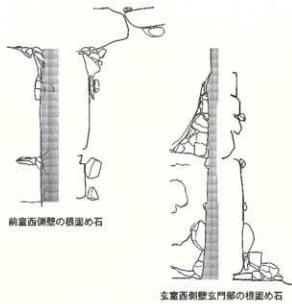
2トレンチにおいて検出したもので、長軸1.8m、短軸1.2mほどの隅丸長方形の形状を示す。周壁は被熱で硬化した部分が確認されるが、壁面の多くはすでに落下・消失していた。硬化面の観察からすると、かなりの高温で使用されたものと想定される。壁は高い部分で40cmほどを残している。覆土は2層に分層され、下層の⑩層には粒状・枝状の炭化物が充填していた。



第6図 2トレンチ、炭窯及びトレンチ土層実測図 (S-1/40)



第7図 昭和47年石室実測図 (S-1/40)



第8図 平成19年石室実測図 (S-1/40)

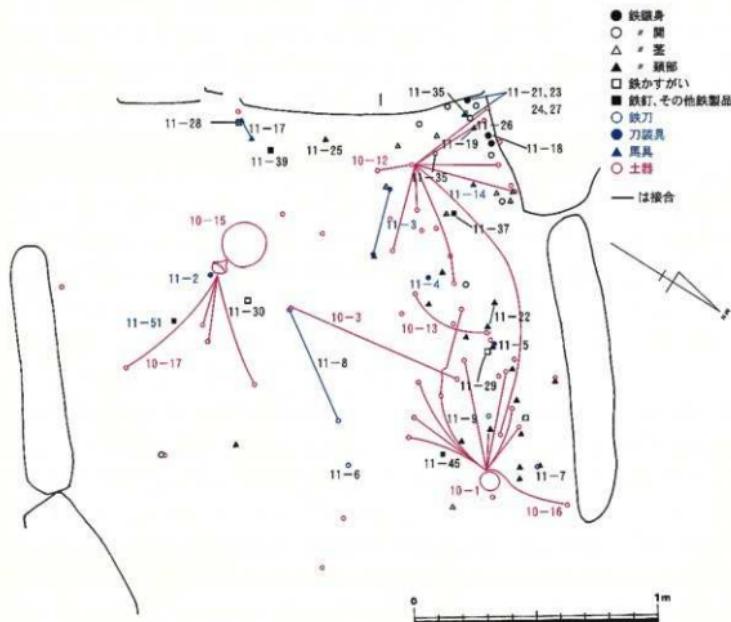
V. 遺物の出土状況と出土遺物

1. 遺物の出土状況 (第9図)

遺物はドット・マップで記録し玄室から6点、前室から218点を取上げた。

玄室からは搅乱層出土の金環2点を加え計8点のみの出土で、多くは敷石とともに玄室外に持ち出されていた。出土傾向は鉄鎌、馬具は前室西玄門付近の出土が多く、刀及び刀装具は散在し玄室からかき出された状態を示していた。土器は前室出土がほとんどで、第10図1と15は口縁部を上にした状態で検出された以外は散在するも、近接する状態で検出された。また前室東玄門付近には敷石が取り除かれた部分があり、この部分に浅く不明瞭な落ち込みがあり遺物の出土がやや多く見られた。

また前室西側壁石間から赤絵仏飯器（第10図18）が出土しており、18世紀前半には開口していたものと思われる。また羨道側東側羨門付近、すなわち本来の羨道部石積みの位置する部分から印判手碗が出土しており、明治期に羨道、墓道、西側羨門部分が破壊されたことが理解された。



第9図 前室遺物分布図 (S-1/20 「No.-No.」は「挿図番号-遺物番号」に一致)

2. 出土遺物

—1 土器

全部で26点を図示した。土器番号の次の（ ）書き番号は遺物取り上げ番号で、玄室のみ「玄室No.」と略す。他は前室出土である。土器は前室での接合が多く、すべての接合関係を（ ）書きしていない。第9図に接合関係図を掲載した。

1~11は須恵器である。1は完形の蓋である。内外とも暗灰色を呈し、胎土に石英粒を含む。口径8.7cm、器高4.6cm。2(11, 24)も蓋として作図したが身の可能性もある。内外とも暗灰色を呈し、胎土に石英粒を含む。復元口径10.0cm、器高3.3cm。3(20, 55)は平瓶の口縁と思われる破片で、焼成良く硬質で、一部が黒く光っている。断面は淡い小豆色を呈する。復元口径6.0cm。4(玄4)は脚部の小破片である。内面にヘラ切りの痕跡があり、透かしがあったものと思われる。硬質に焼け、表面は黒皮状、断面は淡い小豆色を呈する。胎土に石英粒を含む。復元底径8.0cm。5~11は壺の破片である。5は口縁部で羨道部の搅乱土中より出土。焼成良く硬質である。表面は1~2mmの厚さで黒皮状を呈し、芯は灰白色で、胎土に石英粒を含む。復元口径20.8cm。6は石室埋土より出土。頸部付近の破片と思われる。硬質で表面は灰色、芯は淡灰色を呈する。胎土に石英粒を含む。7は前室搅乱土から出土。内外とも灰色で、断面は暗紫色を呈し、石英粒を含む。8は玄室埋土より出土。表面は内外とも灰色で、断面は淡い小豆色。9は羨道部の搅乱土中より出土。胎土粗く、白色粒子を含む。内外とも表面は灰色であるが、断面は暗紫色を呈する。10は前室搅乱土から出土。表面は灰色、断面は灰白色で、焼成良く硬質である。11は3Tサブトレンチ出土。内外とも表面は灰色、焼成良く硬質で、芯は淡い小豆色を呈する。

12~17は土師器である。12(1他多数)は碗形で、口唇部に僅かな屈曲をつける。外面は丹塗りで、細かな研磨を施す。底部付近にはヘラ切り痕が残る。内面は赤橙色で滑らかに仕上げてある。胎土に細かな石英粒、白雲母を含む。口径11.3cm、器高5.3cm。13(9他)は浅い碗状の製品である。赤橙色を呈し、内面に放射状の暗文が施されている。外面は傷みが激しく、調整等不明。復元口径10.0cm、器高3.1cm。14(玄6)は表面赤橙色で断面は暗茶褐色を呈する。保存が極めて悪い。外面に櫛目状の線があり、17に似た高坏の坏部の破片と思われる。15(6)は口縁が内湾する皿で、ほぼ完形である。外面は淡赤橙色でミガキの痕跡がある。丹については不明。薄い黒斑が認められる。内面は淡赤橙色~淡黄褐色である。口径17.7cm、器高3.7cm。16(16)は浅い皿で、外面丹塗り。細かな研磨が施されている。破片数は多いが保存状態が悪く、接合困難な資料である。軟質で胎土に石英粒を含む。復元口径16.0cm、器高2.0cm。17(7他)は高坏である。赤橙色を呈し軟質である。胎土に白雲母粉末を多く含む。須恵器の高坏を模した土師器と思われる。器高9.4cm、復元口径8.7cm、台径7.4cm。

18~27は近世~近代の磁器であって、ほとんどが明治期の印判手である。18は簡略な赤絵を施した仏瓶器で、前室側壁の上方に差し込まれていた。19、20は玄室搅乱土からの出土。21、22、23は羨道部の搅乱土、24、25は2T出土。26は3T、27は墳丘石列付近(烟)出土。

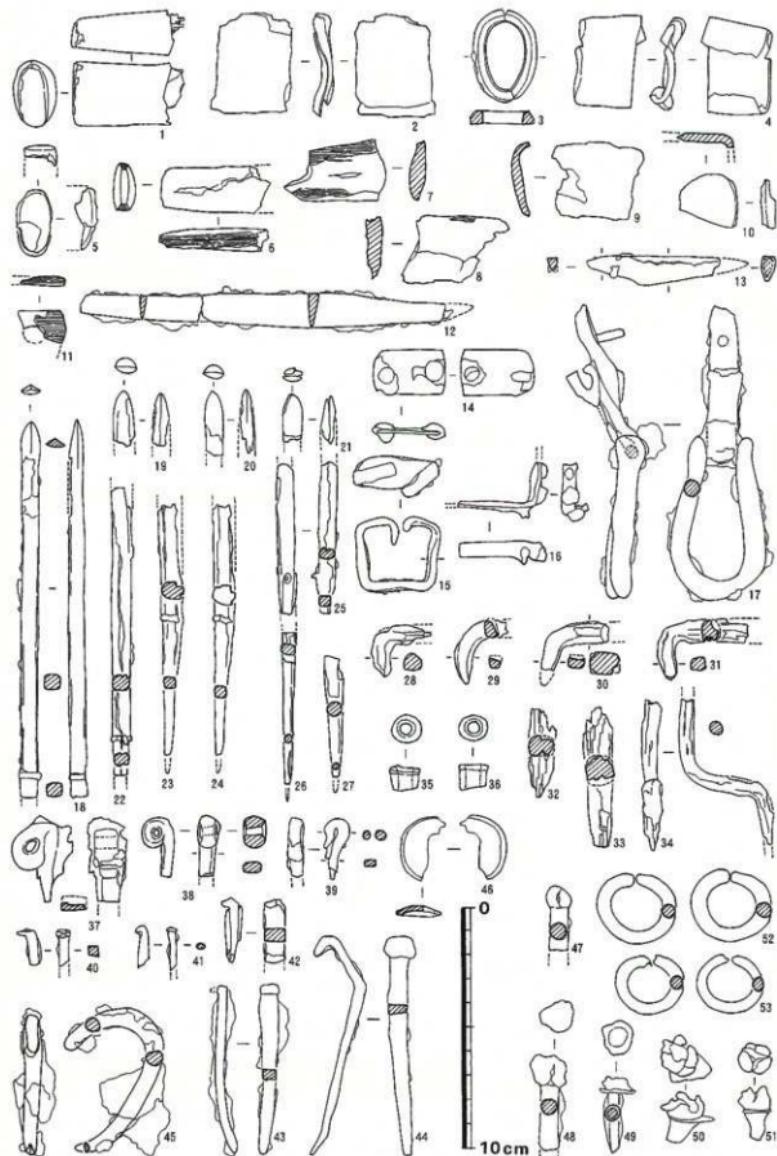


第10図 遺物実測図 1 (S-1/3)

— 2 鉄製品、その他遺物

ここでは土器以外の遺物を取り上げる（番号の次の（ ）書き番号は遺物取上げ番号で、玄室のみ「玄No」と略す。他は前室出土）。

1（玄3）は青銅製の柄頭金具で現存長27mm、幅14.5mmを測る。頭は鑲付けされたものと思われ、この部分にヒビが入っている。青銅の厚みは1～1.5mmほどで梢円形状を呈す。中実となっており茎、木質で充填されている。玄室敷石76の下から出土した。2（8）は青銅製の鞘口金具で土圧又は人為により扁平になっている。現存長31mmで、幅30mm、厚さ20mm程度に復元される。3（59+62）は銅製の責金具資料で、平面卵形、断面五角形で、内面、上・下面に鍛痕跡を留める。外径で長軸38mm、短軸26mm、内径で長軸28mm、短軸16mmを測る。4（73）は青銅製の鞘尻金具で現存長24mmを測る。鞘尻の鑲付け部分から半割・扁平となっており、鑲付け部分を接合・復元すると幅25mm、厚さ15mmほどに復元できる。5（96）は鉄製柄頭で、周縁部を多く欠損している。現存長27mm、幅14.5mmを測る。厚さ1～1.5mmの鉄を鍛造している。6～9、11は鉄刀資料で、6（12）は茎資料である。現存長44mm、幅20mm、厚さ9mmを測る。先の浅い栗尻に切る。棟・腹・茎尻に木質を留める。7～9は刀の皮鉄部分でいずれも木質を留める。7（177）は茎かとも思われる、厚さ6mmほどを残す。8（20+25）は棟部に木質を留める。平棟・平造りで、厚さ6mmほどを測る。9（167）は棟と刃縁を欠損する資料。11は茎で全体に木質を留める。中ほどにやや大きめの目釘穴を残している。茎尻は先入り山形に切る。形状からして刀子の茎と思われる。10（96）は鉄製の鞘尻金具かと想定される資料である。厚さ3mmほどで鉄板を鍛造している。12は現存長14.8mmの刀子で、平棟・平造りで茎を欠損する。2トレンチの周溝内出土。13は現存長54mmの刀子で刃長38mm、茎長16mmの小型の資料である。刃部周縁には厚く木質を留める。14（142）は留金具で四角形状の青銅地に鉄板を被せたもの上から鉄鋸2本で留めている。現存長30mm、幅18.5mm、現存厚1.6mmを測る。15（52）は鉄製の金具で用途不明。梢円形状の台部から伸びる2本の手を直角に折り曲げており、把手などを補強するものか。16は幅6.5mmの鉄板を直角に折り曲げた資料で、全形は不明である。釘穴などは看取されない。17（28+135）は鞍金具で幅12mmの鉄板を外側に曲げて連結部を作成している。脚の先端部には鞍橋に取り付ける断面円形の鉄釘が17mmほど残っている。輪部は全長68mm、幅39mmを測り、断面円形の鉄棒を折り曲げて作成する。18～27は鉄鎌資料である。完存するものは見られないが18+28とすると21cm前後の長さとなる。鎌身は4本を確認したが、すべて柳葉型片鎌造無闇式で長頸式のものである。細片化したものが多く正確なカウントができるが、断面形状の点数は方形：円形で、頸～關部で14：4、茎部で12：16を数え頸部は円形で作成するものが少数で、茎部は円形に成形するものが過半を占めており、頸、茎必ずしも一致しない傾向が窺える。茎部にはすべて木質を留めている。28～31は鉄製の鎌、32、33は鉄製の鎌と想定される資料である。34（33）は用途不明の鉄製品。35（46）、36（54）は柄前の鉄製鎌目金具で対である。筒状品でやや丸みを帯びた端部を見せる。いずれも5mmほどの中空部を有している。37～44は鉄釘である。37（126）～39（134）は環状に曲げたもので釘部断面は長



第11図 遺物実測図 2 (S-1/2; 47~53はS-1/1)

方形状である。40～44は角釘で先端を折り曲げている。大・中・小の3種がある。45(199)は釣針状の鉄製品。46(60)は釦状の鍛鉄品である。47～51は丸い頭部をもつ鉄錠で、47、48は弓金具の一部と想定され、軸部に木質を残す。49～51には青銅の板をわずかに残し、軸部には木質を留めている。軸部先端が細ることから木棺などの飾金具の錠であろう。52、53(玄1、2)はともに玄室から出土した金環で2セットである。52は内径10mm、53はひと回り小さい。52は敷石9の下から出土した。

VI. 調査の総括

丸尾古墳は直径15m前後の円墳と想定され、複室構造の横穴式石室を有するものである。墳丘は周囲の地山を成形して盛土し、周辺から際立たせたものと想定される。石室は東側部分が崩壊・落下しているが、玄室は長方形プランを採用している。石室架構法は奥壁、側壁に架け渡す力石を採用し、一部重箱積みが看取されるものの、持ち送り式に架構している。樋石と天井石との間には高窓風の間隙を有している。このような造りは、同じ小長井町に所在する大峰古墳にも採用されており、この時期の特徴の一つであろう。

大峰古墳は複室構造で玄門、羨門の2箇所の樋石上で天井石との間に大きな空間が存在している。樋石は両側壁に渡しかけられ、丁度石梁のような景観を見せている。また奥壁と両側壁に架構した石棚を有する点でも特徴的である。石棚は石屋形との関連性が指摘され(注1)、また装飾壁画を併せ持つ古墳に採用される例も多い(注2)。さらに丸尾古墳に見られる高窓施設は前室袖石上に設けた乗場古墳(注3)、王塚古墳(注4)などに類例があり、さらに装飾古墳であるという点で共通している。石棚あるいは石屋形を持つ古墳は有明海沿岸に多く分布し、さらに複室・装飾古墳である共通性を有している。装飾古墳は石棺・石障系、壁画系、横穴系と推移するとされるが、その中でも本墳のような壁面への線刻画は最も後出るとされる。線刻の主題は不明といわざるを得ないが、格子状の幾何学的文様を採用する例は少数であり、隣県の勇猛寺1号墳(注5)、永池古墳(注5)、米の隈古墳(注5)に認められる。斜格子文との関連も想定されるが、本墳の施文例を見る限りにおいてはその関連性は認めがたい。

丸尾古墳の近くには長戸鬼塚古墳(注6)がある。複室構造の横穴式石室墳で玄室東腰石と前室西腰石に線刻壁画を有する。石室プランは両側壁が玄室から羨道部まで直線的に企画されたもので、大峰古墳との石室プラン・構造の類似性が指摘される(第13図)。

三者の共通する属性は複室構造の横穴式石室であること、大峰、丸尾では高窓施設を有すること、丸尾、長戸鬼塚では線刻壁画を有することであり、三者が有機的な関連性を有していたであろうことを髣髴させるのである。

本古墳の最大の特徴は、奥壁、西側壁腰石に線刻壁画を有する点である。線刻壁画は近接の長戸鬼塚古墳、高来町の善神さん古墳、毫岐の古墳群に見られ県内で9基ほど存在する。いずれも捕鯨図や人物図など具象的な文様を線刻する例が見受けられ、本古墳との違いを見せていく。

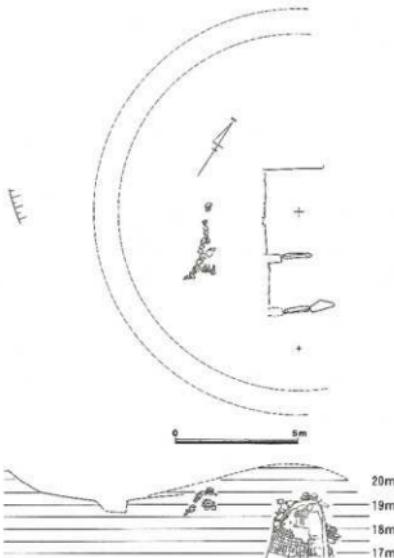
る。本古墳の線刻は奥壁、腰石ともに壁面全体に幅2~3mmの線刻をフリーハンドで施しており、奥壁ではタテ16本、横17本を施し、その後全面に赤色顔料を塗布している。西側壁腰石にはタテ15本、ヨコ11本を線刻するが、赤色顔料の塗布は行わない。タテ線は中央部は垂線に近いが端部に行くに従い使用石材の外形線に近い斜線となっており、必ずしも格子文を意図したとは考えられない。奥壁のように線刻の上に赤色顔料を塗布していることは、この段階で装飾が終了したと見るべきであり、経緯線が交差することに意味を持つ装飾文様であったことが理解され、この種幾何学的文様を持つ古墳の立地する地域に共通に理解されるべき宗教観、あるいは他界観の醸成があったと見るべきであろう。

さて、本古墳の築造時期であるが、初葬時のものは前室西側の土師器盤（第10図12）が相当し、6世紀後半期の年代が付与される。また前室出土の須恵器類（同図1、2、17）は小田編年IV A期（注7）の所産に相当し、7世紀初頭の第二次葬あるいは追善供養時の所産と想定される。さらに土師器（同図13、15、16）は第三次葬あるいは追善供養に伴うものと想定され7世紀後半頃の所産と考えられる。

第二次葬に際しては玄室からの初葬時の副葬品の整理が行われたものと想定され、刀、刀装具などの前室からの出土はこのことを物語っている。さらに玄室敷石9の下から金環（第11図53）や敷石76の下から青銅製把頭（同図1）が出土していることにより、さらに前室においても敷石下から遺物（同図17、25、34、37、39、51）が検出されることにより、初葬時は敷石の敷設はなく、第二次葬時以降に敷設されたものと考えられる。

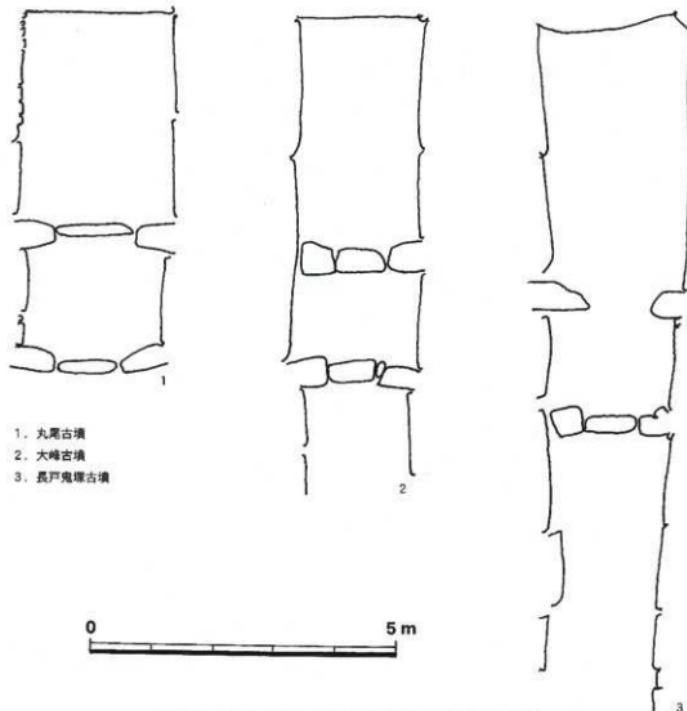
出土遺物に関して大・中・小の鉄釘が出土している。初葬期から木棺の使用が認められるのか、現状では不明であるが今後類似古墳の調査などにより考究すべき点である。

また、丸尾古墳の両袖式で複室を有する石室形態は、陸を介した佐賀からの伝播よりも、有明海を介した筑後川から菊池川周辺域との繋がりが想定され、大村市の両袖式の複室式古墳である小路口古墳を含めて総合的に検討する必要がある。



第12図 墳丘想定図 (S-1/200)

- 注1 蔵富士 寛 「石棚考—九州における横穴式石室内石棚状施設の成立と展開—」
『日本考古学』第14号 2002
- 注2 高木 正文 「肥後における装飾古墳の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』第80集
1999
- 注3 小田富士雄編 「福岡県乗場古墳」 「八女古窯跡群調査報告」 IV 1971
- 注4 梅原末治・小林行雄 「筑前国嘉穂郡王塚装飾古墳」『京都帝国大学文学部考古学研究
報告』 第15冊 1940
小林行雄編 「装飾古墳」 平凡社 1964
- 福岡県教育委員会 「特別史跡王塚古墳の保存」 1975
- 注5 佐賀県立博物館 「装飾古墳の壁画」 1973
- 注6 長崎県教育委員会 「長崎県文化財調査集報V」 1982
小長井町教育委員会 「長戸鬼塚古墳」 「小長井町文化財調査報告書」 第1集 1998
- 注7 小田富士雄編 「八女古窯跡群調査報告」 I ~ IV 1969~1972



第13図 丸尾、大峰、長戸鬼塚石室平面図 (S-1/80)

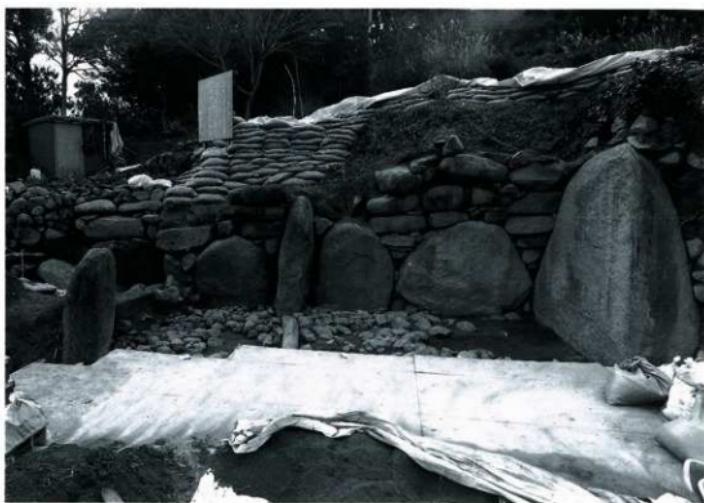
図 版



1. 丸尾古墳遠景（東から）



2. 丸尾古墳調査前の状況（東から）



1. 敷石敷設状況（東から）



2. 敷石敷設状況（南から）



3. 敷石敷設状況（北から）



1. 敷石除去後と根固め石の状況（東から）



2. 敷石除去後と
根固め石の状況（南から）



1. 奥壁と裏込めの状況（東から）



2. 石列・集石と封土の状況（南から）



3. 1トレンチ土層堆積状況（西から）



1. 2 レンチ炭窯半掘状況（北から）



2. 2~3 レンチ土層堆積状況（東から）



3. 昭和40年頃の丸尾古墳（下川達彌氏と封土の残存状況）



1. 玄室青銅製把頭（第11図1）出土状況（敷石76の下）



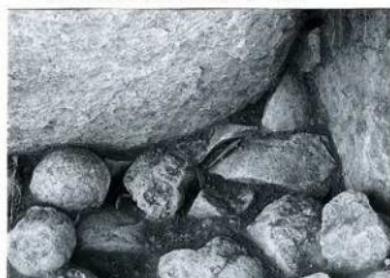
2. 玄室金環（第11図53）出土状況（敷石9の下）



3. 前室遺物（第11図17、39）出土状況



4. 前室遺物（第10図1、12、15）出土状況



5. 前室遺物（第11図15、鐵鎌茎）出土状況

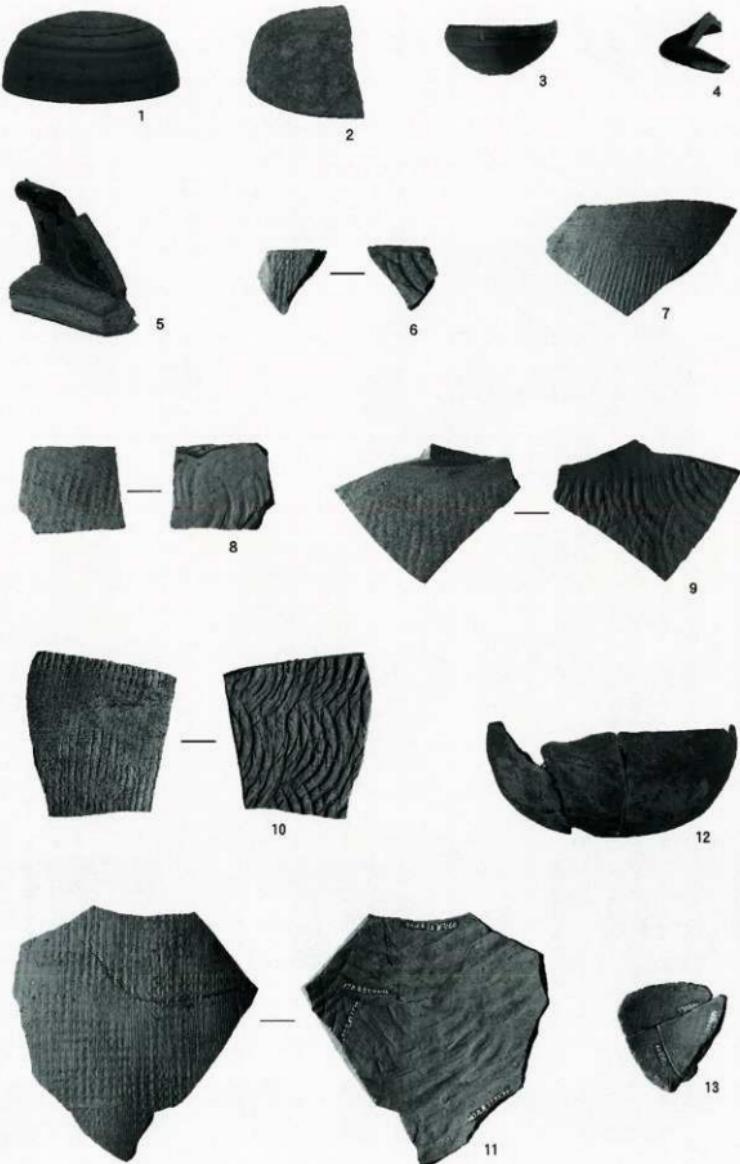


6. 前室遺物（第11図35、鐵鎌片）出土状況



7. 2トレンチ サブ・トレ 須恵器(第10図11)出土状況





出土遺物・土器 (1~13)



14



15



16



17



18



19



20



21



22



23



24



25

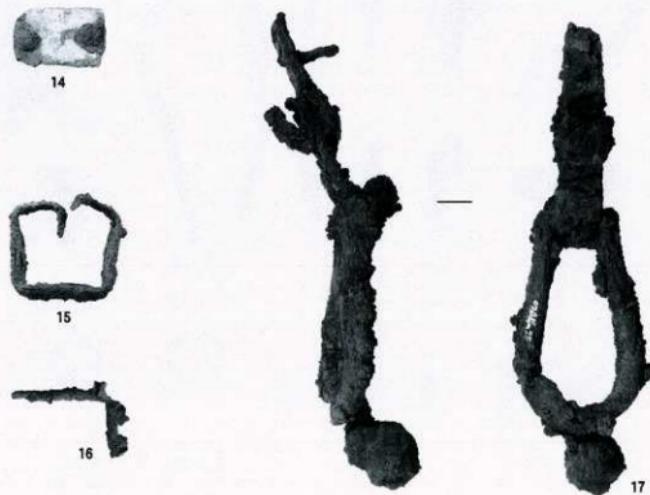
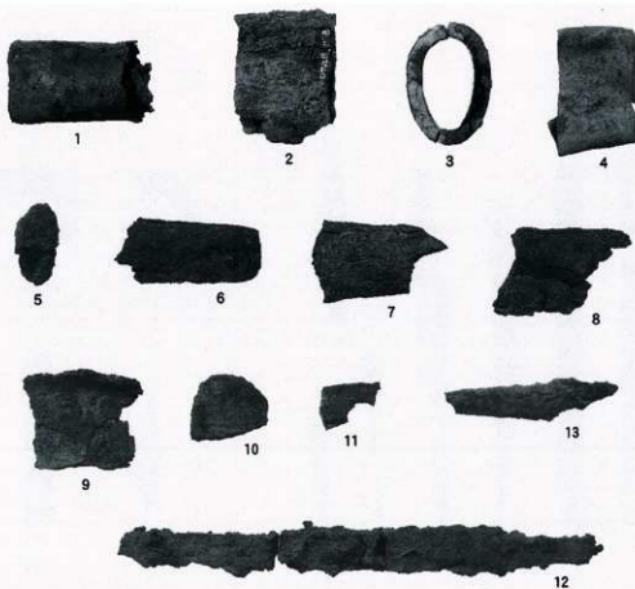


26



27

出土遺物・土器 (14~27)



出土遺物・鉄製品など (1~17)



出土遺物・鉄製品など (18~53)

報告書抄録

ふりがな	まるおこふん							
書名	丸尾古墳							
副書名	小長井町丸尾地区急傾斜崩壊対策事業に伴う緊急発掘調査報告							
卷次								
シリーズ名	諫早市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第22集							
編著者名	秀島貞康・古賀力・橋本幸男							
編集機関	諫早市教育委員会							
所在地	〒854-8601 長崎県諫早市東小路町7番1号 TEL(0957)22-1500							
発行年月日	西暦2008年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
丸尾古墳	長崎県諫早市小長井町牧名丸尾	42204	85-20	32度	130度	2007.12.17 ~08.02.22	51m ²	急傾斜崩壊 対策事業
54分	11分	50秒						
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
	墳墓	古墳時代	複室両袖式 横穴式石室 石列 集石 炭窯	須恵器 土師器 近世陶器 刀装具 鉄鎌 鉄製馬具 金環				

諫早市文化財調査報告書 第22集

丸尾古墳

小長井町丸尾地区急傾斜崩壊対策事業に伴う緊急発掘調査報告

2008. 3. 31

発行所 講早市教育委員会
諫早市東小路町7番1号

印刷所 講早印刷株式会社
諫早市福田町20番26号